

弔 辞

三 浦 春 恵

清瀬久美子先生、こんなに突然神様のもとにいかれるとは、誰もが信じられないことでした。

先生の大好きな相模女子大の小川秀子先生は、悲しいお知らせに、言下に「そんなことはない。うそです。」と否定された程のそれは驚きでした。その小川先生は東京からとんで今ここに来て下さっていますよ、久美子先生。

四月十九日には最後になった調理学実験の授業をされ、今年の授業計画に新たな意欲をもってはりきっておられましたのに。又、四月十一日には学校での私の礼拝司会の時、賛美歌二七一番をひいて下さいましたのに。

学生達の又、教会員の多くは信じられない思いの中におります。

先生が北星短大へこられてから九年間、机も研究室も隣り合せて、もっとも身近におつきあいさせて

いただいた私には、先生が病とたたかいたながら驚くべき精神力をもって、ひたすら授業にたちむかわれる姿を拝見し、さりげない様子をされながら、御自身にとつては、燃えつきる程の全力をふりしぼっての日々であったのだと今にして思いを至しておりました。久美子先生、本当に、どんなにかつらく大へんでしたでしょう。それもこれも最愛の健先生の深い愛情と、御両親のあふれるようないつくしみの支えがあったからこそ耐えられたものと察せられます。その意味では、先生はととてもお幸せでしたね。それだけに、先にお姉さんを天におくった御両親、半年余り前、お母様を天に送ったばかりの健先生の悲しみはたとえようもないものと存じます。誰もがいやすことのできない大きな悲しみを神様がおいやし下さることを信じて祈り求めるばかりでございます。

久美子先生は相模女子大を退職され、北星短大にこられます時、相模女子大のクリスチャンである恩師清水先生が聖書をあなたに贈って下さり、共に祈って札幌へむかわせて下さったということをおききしております。この時から先生は神様に捕えられ、導かれていたものと信じます。受洗の決心をされ、まっしぐらに札幌教会金井輝夫牧師のもとへいかれ、受洗をクリスマスまで待てないと七月の礼拝に只一人この所で洗礼式をあげていただき信仰生活に入られたことも、本当に久美子先生らしい行動力と、神様の大きな働きを見せられる思いで忘れることができません。

一ヶ月程前、こんなことをいわれました。体の調子が悪い時、私が聖地イスラエルからのお土産にさしあげたオリーブの木の彫りのイエス様の像を手にして眺めていると「イエス様のお苦しみを思ったら、私の苦しみなんか小さなものだと思うされるんですよ。」と、しみじみと話されました。イエス様に力づけられて、平安を与えられている久美子先生の信仰に涙が出る思いでした。

久美子先生が、心はずませながら作る得意のケー

キで、私達学校中のものは、なんとステキな思いにとびっきりのおいしさを数えきれない程与えられたことでしょう。「おいしい！」と感嘆の声をあげると「うれしい」とニコリされる笑顔、お母様のプロはだしの腕で、心をこめて仕立てられたウェディングドレスを着て健先生と並んだ花嫁姿の輝くような笑顔、洗礼をうけた日の何ともいえぬ晴れやかな笑顔などなど、いつもいつも笑顔をみせて下さり、本当にありがとうございます。

私達の脳裏に昨日のこのように記憶にあざやかなのは、昨年のクリスマス。新しく完成した校舎の美しい学生ラウンジに飾られた先生の指導でつくられたお菓子の三十数個の家、家、家です。それは学生一人一人が心をこめて一軒ごとに個性豊かにクリスマスの夢を一杯こめた楽しい、ほほえましい作品とお菓子のツリー、そして教会堂などの見事でした。毎年のことでしたが最後になったこの時は一際すばらしいものでした。

去る三十日の夜、久美子先生は神様のみもとにいかれる九時間余り前、私を病室の枕許に呼んで下さいました。そして苦しい息の中から「くやしい。や

りたいことがいっぱいあったのに。」と涙しておっしゃいました。本当にどんなにか無念でやる方ない胸中かを心痛む思いでおききました。

神様の御計画は到底はかりしる事はできません。しかし久美子先生が、心をつくし、精神をつくし、力をつくして教育の業として捧げられたあのクリスマスのお菓子を渡し、手がけた学生はもとより、全学生がめぐりくるクリスマススの度に、生涯、心にあたたかい思い出の灯をともしつづけるにちがいありません。

先生は沢山の種をまかれました。いつも調理実習の時、元気な声で「火加減に気をつけて下さい」とか、「ゆですぎないで下さい」などと指導されたように、神様のもとで一人一人をみつめて、まかれた種がしっかり芽を出し、花を咲かせ、実を結ぶように声援して下さい。お願いいたします。

この世にあつての無念さにかわるすばらしい何倍ものよろこびで神様は必ず充たして下さることを信じます。その時の久美子先生の最高の笑顔を思いつつ、多くの学生、教職員、そして教会員、久美子さんに出会わされた方々と共にお別れの挨拶といたし

ます。

さようなら。

一九九〇年五月一日

清瀬久美子先生の略歴と業績

「オーストリアの料理・菓子」(同紀要二五号、一九八八年)

- 一九五〇年三月二四日 北海道赤平市で出生
- 一九六八年三月 北海道立阿寒高等学校卒業
- 一九七二年三月 相模女子大学学芸学部卒業
- 一九七四年三月 京都女子大学大学院家政学研究所修士課程終了(修士)
- 一九七四年四月 相模女子大学学芸学部助手
- 一九八一年四月 北星学園女子短期大学専任講師
- 一九八九年四月 同学助教
- 一九九〇年五月一日 召天

○所属学芸 日本家政学会、日本調理科学会、日本農芸化学会、日本栄養食糧学会

○主要論文

- 「開拓農民の食生活の一考察」(共著、北星学園女子短期大学紀要二二号、一九八三年)
- 「鶏卵を用いた皮蛋(Pidan)の製造に関する研究」(同紀要二四号、一九八七年)